

振り返りますと、2013年度の地域支援プロジェクトには、多くの新展開がありました。

第1の展開は、心理的地域支援へのニーズとして、発達障害児・者への理解や対応が地域から多く求められていることがわかった点です。地域では領域を越えて、発達障害児・者の理解と具体的対応について知りたいという声が増しに大きくなっています。今年度はバラエティに富む地域支援活動の中でも、特に発達障害児・者支援に係わる活動を重点化し、伊佐市・霧島市を活動拠点として位置付けました。

第2の展開は、本プロジェクトが年度当初に掲げた『見える化』の推進です。各活動は、支援計画と教育計画を基にしたパッケージ化を行いましたが、将来は様々な支援パッケージをメニュー化し、地域行政や修了生が支援を選べるようにしたいという目論見です。また、各教育内容をコンテンツ化していくことで、誰でも活用可能な実践的な教育内容にリテラシー化を目指し、地域行政や専門家、ひいては学生、地域住民が広く活用できることを想像していました。これは数年単位で開発していく必要がありますが、『コンテンツ化、メニュー化、リテラシー化』という方向性が明確になりました。

第3の展開は、プロジェクト・スタッフに新たに小澤講師が加わり、企画・運用ならびに研究結果の分析力が格段にアップしたことです。服巻プロジェクト・コ・リーダーは、霧島市の母子保健事業を支援する拠点活動を継続していますが、小澤、川口の両スタッフとチームを組み、乳幼児健診などの現場視察に出かけています。保健師のニーズの汲み上げからプロジェクトとしての実際の地域貢献まで、これまでの単独活動よりもチーム活動がより大切になるでしょう。

第4の展開は、土岐プロジェクトリーダーが拠点活動に係わってきた伊佐市で、修了生が発達支援の拠点である伊佐市トータルサポートセンターに就職し、今年度からは地域の専門家として本プロジェクトを支えてくれたことです（第2章2-1参照）。支援活動が縁となって就職をした学生は他にも複数いますが、本プロジェクトは、大学と地域における人材マッチングという点でも、ユニークな活動だといえるでしょう。

本研究科は、今後も継続して地域との連携を強化し、同時に、超実践的ともいえるオリジナルな実務教育を展開していきます。専門職学位課程として、大学院生が通常の実習のみならず、地域支援という特殊な現場体験を通じて、『自ら学ぶ力』をはぐくみながら主体的に学習を行い、地域文化に慣れ親しみ、チーム意識を育て、コミュニケーション能力や支援実行に関する能力を互いに磨き合えるような実践教育と教育研究を積み重ねていければと切に思います。

今後、地域支援プロジェクトは、『コンテンツ化、メニュー化、リテラシー化』というナレッジ化（知識教材化）を見据えた方向へと進みます。現代社会の心理的ニーズに即した『見える化』は、私たち教育者の課題ともいえます。臨床心理学的技術や支援ノウハウの指導的伝承に頼るだけではなく、支援プロセスを明文化し、技術やノウハウをナレッジとして整理をしていく必要があります。そうできれば、初学者や地域の人たちに対しても“熟練するためのポイント”を差し示せるのではないのでしょうか。

こうした実践教育は、短期的に進められるわけではなく、卒後を見通した中長期的な人材育成の一環として進める必要があるように思います。本研究科は、実務教育の新しいあり方を発信し続けていきたいと思っています。

